

第37号 華山会報

平成28年11月1日

公益財団法人華山会



松浦武四郎肖像



松浦武四郎と渡辺小華 — 幕末・維新の交流

松浦武四郎記念館学芸員 山本 命

松浦武四郎（一八一八〜一八八八）は、幕末の一八一八年に伊勢国一志郡須川村、現在の三重県松阪市に生まれる。その生涯で日本中を巡り歩き、さらにロシアとの外交問題の最前線であった蝦夷地を6度にわたり探査して、百五十一冊に及ぶ記録と、九千八百にのぼるアイヌ語地名を収めた地図を完成させた。明治維新には、武四郎の提案によって「蝦夷地」が「北海道」に改められたことから、没後は「北海道の名付け親」と称されてきた。故郷の松阪市には松浦武四郎記念館が建ち、旅行家・探検家であるとともに、日本の名山に数多く登頂した登山家であり、作家としても二百冊を超える著作を残し、幅広い交友関係を築くなど、いくつもの顔を持つ武四郎の姿を今に伝えている。

武四郎が収集した文献には、異国船の来航や海防に関するものも多く、渡辺華山の「慎機論」や高野長英の「戊戌夢物語」の写本が含まれている。また、華山の息子である小華に関係する資料が、武四郎の子孫や実家へと伝えられており、現在19点を松浦武四郎記念館で収蔵している。慶応元年（一八六五）に武四郎が出版した蝦夷地紀行本の一つである『西蝦夷日誌 初編』には、小華が描いた挿絵「岩登りの図」があり、武四郎が依頼して描いてもらったものである。遅くとも慶応元年以前から二人は交流があったと思われるが、以降も7冊の武四郎の著作に、小華による挿絵や古物を模写した図が収められている。小華から武四郎へ宛てた手紙もあり、武四郎から贈られた珍菓へのお礼が述べられている。この手紙はその後武四郎の実家へと贈られ、その際に「渡辺諧 三州 三宅備後守老臣 渡辺華山悱 号小華 家老を勤め候て画をよくす」と武四郎による簡潔な人物解説が添えられる。どのような経緯で二人が出会ったかは明らかではないが、小華の最晩年となる明治19年に描かれた「里芋図」（賛は漢詩人の小野湖山）が武四郎のもとにあることから、明治二十年（一八八七）に小華が亡くなるまでその交友は続いていたとみてよいだろう。

この他にも、明治二年に描かれた「菊図」には、小華と村田香谷が菊花を、富岡鉄斎が花器を、大田垣蓮月が和歌を寄せ書きにした、他では見られないような絵もあり、平成十九年（二〇〇七）に田原市博物館で開催された秋の企画展「没後百二十年 渡辺小華展 華椿系の百花と水墨」でも展示されているので、図録をご覧いただきたい。

小華が亡くなった明治二十年十二月から約二ヶ月後の明治二十一年二月、武四郎も後を追うようにこの世を去った。激動の幕末を生き抜いてきた二人は、互いの存在を認め合いながら明治という新しい時代を生きたのではないだろうか。二人の偉人は、あと一年と少し先に没後百三十年を迎える。

蜜社の獄中の書簡

華山が訴えたかったこと

別所興一

蜜社の獄とは、徳川幕府が蜜学社中（渡辺華山・高野長英ら海外事情研究仲間）に加えた言論弾圧事件である。

天保十年（一八三九）五月十四日、華山は突然幕吏に逮捕された。逮捕の容疑は無人島（小笠原諸島）密航の計画と大塩平八郎との内通の二つの嫌疑だったが、逮捕三日後の華山の獄中書簡では真相が全く分からないでつち上げ事件だという感想が洩らされている。取調べの結果、この二つの嫌疑は間もなく無実であることが証明される。しかし、家宅搜索により押収された未定稿の『慎機論』や『西洋事情書（初稿）』などに幕府政治批判の文言が見られることが、尋常ならざる罪科の決め手とされることになった。

同志の鈴木春山（田原藩医、蘭学者）宛の六月九日付の書簡では、やっと冷静さを取り戻した心境を次のように説明している。

「私は心によましいことは全くありませんが、何と言っても数十年間考えてきたことがいっぱいあり、少しでもお国の役に立ちたいと思い、この秋からはもつと勇気をふるい起こして取り組むつもりでした。しかし、百日ノ説法、屁一ツ、という結果になりました。……今日憂慮すべきは海外事情です。西洋の学説を開鎖すると、西洋諸国がますます文明開化されてゆくのに、わが日本はますます海外事情に暗くなります。社会の上級の者が海外事情に暗く、下級の者が明るくなると、上級の者は海外事情を忌み嫌い、下級の者は過激化します。そのことは百年後には多くの人々が知ることになるでしょう。誠に恐れ入るべき内容ですので、それを上申することはできません」

華山の海外事情研究は、もともと藩海防掛りという役目柄の必要に基づくもので、幕府政治の是非を論ずることを目ざしたものではありません。が、いつしか幕府の対外政策の非を指摘せざるを得なかったのである。華山は元来、幕府の文教政策をつかさどる林家の塾頭の佐藤一斎の門人だったが、漢訳洋書や高野長英らから入手した蘭学情報に接するにつれ

て世界の現状に目を開き、翻訳された蘭書の研究に儒学者仲間を誘って取り組むようになった。

それが目付（監察に当たる幕府の役職）の鳥居耀蔵や大学頭（幕府の文教の元締め）の林述斎ら林家関係者に、飼い犬に手を噛まれたような思いを抱かせることになったのである。特に華山・長英らがモリソン号事件で幕府の間答無用の異国船打ち払い政策を批判したり、江戸湾防備の測量調査の際に蘭学に理解のある伊豆韮山代官の江川英龍（鳥居一派のライバル）を支援したりしたことを契機として、鳥居耀蔵らはその儒教的守旧主義の立場から華山・長英らの言動を憎み、その弾圧の機会を狙っていたのである。

華山らを別件逮捕して幕政批判の罪で処罰しようとした今回の事件について、華山は同じ春山宛の書簡で「この事件を画策したのは鳥居耀蔵に間違いありません。その策略はたいへん巧妙です。学士（幕府文教元締め・林述斎）は内輪でその準備・工作を進めたのでしよう。そこから今日の結論に及んだと思います」と説き、事件の政治謀略的な構図を的確にとらえていたことがわかる。

目次

題字「華山会報」元華山会理事
故小澤耕一氏

P ① 松浦武四郎と渡辺小華
—幕末・維新の交流—

山本 命

P ② 蜜社の獄中の書簡

別所興一

P ② 目次

P ④ 渡辺華山『毛武遊記』⑭

P ⑧ 渡辺華山筆

『客坐掌記（天保九年）』⑫

P ⑩ 少年物語渡辺華山

読書感想文

P ⑭ 華山の田原行（二十一）

P ⑯ 公益財団法人華山会
からご案内
田原市博物館

また、「私が毎日見聞するのは、まさに地獄の様相を呈しています。ここで誠に良い修行を行うことができません」「この災禍もまた自分をひたすら研ぎ磨くものと受けとめ、むなしく時を過ごさないように心がけています」などと書き、現在の苦境を自己修養の糧にしようという意欲的な生活姿勢も認められる。法廷で具体的問題視された『機論』『西洋事情書』の文章とは、次のようなものだった。

「これは識見が狭いために、ただ悪事に触れず、目をつむむことで国を守ろうとするようなものである。たとえば、あの雷の音を恐れて耳をふさいだり、稲光を嫌って目を閉じたようなのと同じである。ああ、このような井蛙管見の持ち主とは、共に議論することなどできない」

「明末の社会では武士の気風が軽薄になり、国境の変事の兆しが見えても、詩歌・管弦・舞踊にふけていたようだ」

「要職にある大臣は高貴な家柄の子弟たちで、権勢を持つ官職にある者は賄賂で立身した成り上がり者ばかりで、咎め立てるに値しない連中である」

これらの文章を読んだ鳥居は、その儒臣批判に林家の威信を失墜させるものと憤激したであろうし、処士横議を警戒していた老中・水野忠邦は、そのあからさまな大臣批判に烈火のごとく怒ったであろう。これらを書いて公表することは、当時の幕藩体制では極刑に処される厳禁事項であることを知っていたから、華山は執筆を中断し、私的な文書として自室に保管していた事情がわかる。

華山はもともと煩わしい政務から解き放たれ、好きな作画に専念できることを願っていたが、士大夫（文人官僚）としての責任感を捨てきれず、いつしか海防問題に深入りして、窮地に立たされることになったのである。華山は政治と作画の両極の間を揺れ動きながらも、郷国田原と世界をリアルに観察し、近代的な感覚と道理にかなった言説や作画を展開しようとした。しかし、そのひたむきな努力自体が、身の破滅につながりかねない事態を招いたのである。そこに開国前夜の徳川知識人の苦悩があったと言えよう。

人間認識の甘さから、手痛いしつぺ返しを蒙ることになった。換言すれば、「徳川の平和」の利権を守るために手段を選ばない政治権力の悪魔性に対する認識の欠如が、華山を予想もなかった窮地に追い込むことになったのではなからうか。

他方、鈴木春山や椿椿山（画の門弟、幕府直属の武士）・立原杏所（画友、水戸藩士）らから、病気を口実にした仮出獄の願書の提出を勧められたが、華山はその画策をきっぱり拒絶している。表向きには保身のために君家の恥をさらすわけにはいかないと言っているが、実は仮出獄の場合、「他家お預け」の処置になることが多かったことから、老母と生活と共にできない処置は、母親思いの華山としては絶対に受け容れられなかったのである。

華山はマザー・コンプレックスとも言えるほどの母親思いで、獄中書簡でも十数カ所に老母の安否を心配する文言が見られる。

これに対して、妻たかに宛てた書簡は一通だけで、それも留守宅の物品管理と母の介護を依頼するメッセージしか書かれていない。華山の信奉する儒教道德の影響であろうが、

現代的な視点から見ると、奇異な印象を受ける。

同年八月十八日付の椿椿山宛の獄中書簡において、華山は自分の救援のために尽力してくれた師友に対する厚い謝意を述べた上で、その後の心境を次のように表明している。

「自分の生まれつきの性質や努力だけではどうしようもないのが、人間の境遇と言われます。私はそれなりに努力してきたものの、君父のために志を達することができず、中途半端なまま今日に到りました。それならば、せめて世のため人のために尽くしたいと考え、取留めのないことばかりに明け暮れてきました。結局のところこのたびの災禍に巻き込まれ、今日ではすべてを投げ捨てることになりました。そのため母より他に尽くすべきものがなくなりました」

もはや母より他に尽くすべきものがなくなつたという華山の訴えに、自由な思索や創作の羽をもぎ取られた白鳥の痛ましさを読みとるのは、筆者の思い過ごしであろうか。

渡辺華山『毛武遊記』

14

研究会員 加藤 克己

奥山昌庵、佐羽蘭溪、足利へいざのふ。午飯終り蘭溪のもとへいゆき、門に尻かけて酒酌む。足利の桐生を距凡四里許、桐生街を出て一水一山にしたがふ。水は即桐生川、山は即観音山、山名不正、たゞその村名或ハ寺社のあるところにしたがひ、名をおぶせたるなり。故は其山甚だ高からず、蜿蜒陀俯のごとく名けいふべきにもあらぬなるべし。

天保二年（一八三二）十月二十一日続き

奥山昌庵と佐羽蘭溪が足利行きを誘ってくれた。昼食を終えて蘭溪の家へ行き、門に尻をかけて酒を飲む。足利は桐生を隔てること凡そ四里（約十六km）ほどである。桐生の街を出て、一つの川と山に沿って歩いた。川はすなわち桐生川、山はすなわち観音山という。山の名は正しくない。ただその村の名、あるいは神社のある所に従って名をつけただけである。その（ちゃんとした名前がない）訳は、山がそれほど高くはなく、蛇がよろいよると曲がり這うような起伏で、名付けて言うほどのものでないからであろう。

- ※ 奥山昌庵 第11回（34号）参照。
- ※ 佐羽蘭溪 第11回（34号）参照。
- ※ 足利の桐生を距 JR 両毛線の桐生駅―足利

駅間は十四・七km。

※ 一水一山 一筋の川と一つの山。華山たちは桐生新町から東へ進んで桐生川へ出て、右岸の堤防を南下したのであろうか。明治四十二年の地形図には、その他に岩本家の菩提寺である観音院の前を通る道も載っており、その方がまっすぐで早そうに思える。

※ 桐生川 栃木県境の根本山南斜面の根本沢に流れを発し、桐生市の東部を流れ、足利市小俣駅南方の県境付近で渡良瀬川に合流する。

※ 観音山 十月十五日の記事とは別の山で、桐生川より東の桐生市菱町にある山。五万分の地形図には名前がない。都市地図には「観音山」とある。標高三〇七・五m。

※ 蜿蜒陀俯のごとく 蜿蜒長蛇。うねうねと長く続いていること。蛇がよろいよると曲がり這うさま。

川のあなた皆下野国、山皆これに属す。水に沿ふ事一里、有橋、堺野といふ、即下毛ノ堺なり。濱の京、小俣に至る。此村町あり。瓦茨相まじはり長さ二三町もあるべし。街の真中清水流、皆水を車もて家に引、糸を操る。また車に小桶をつけて水をくませなど、大に人力にかわる。山木屋といふ酒店に小酌、肴なし、たゞかづの子さんまのみ。

川の向こうは皆下野国で、山は皆下野に属している。川に沿って歩くこと一里（約四km）、小矢良といふ所、橋があり、堺野という。すなわち下野

国との境である。濱の京、小俣に至る。この村に街がある。瓦屋根と茅屋根とが入り混じって街の長さは二、三町もあるだろう。街の真ん中に清水が流れていて、人々は水を水車で家に引き、糸で操る。また、水車に小さな桶をつけて水をくませるなど、大いに人力の代わりになっている。山木屋という酒店で少し酒を飲む。肴はなく、ただカズノコとサンマのみである。

※ 川のあなた皆下野国 上野国と下野国は桐生川を国境としていたが、昭和三十四年（一九五九）、桐生川左岸の足利郡菱村が越県合併をして桐生市菱町となったので、観音山も今は桐生市に属す。

※ 小矢良 上野国山田郡新宿村小谷原（桐生市浜松町）か。

※ 橋 文に該当するのは、桐生市の南東部で桐生川にかかり、境野町と菱町を結ぶ両国橋と思われるが、その後で濱の京へ行っているの、両国橋は渡らないで、濱の京を過ぎてから境橋（桐生市境野町と足利市小俣とを結ぶ）を渡ったと思われる。

※ 堺野 上野国山田郡境野村（桐生市境野町）。

※ 濱の京 山田郡境野村の小字名。明治四十二年の地形図に「濱京」が載っている。

※ 小俣 下野国足利郡小俣村（足利市小俣町）。

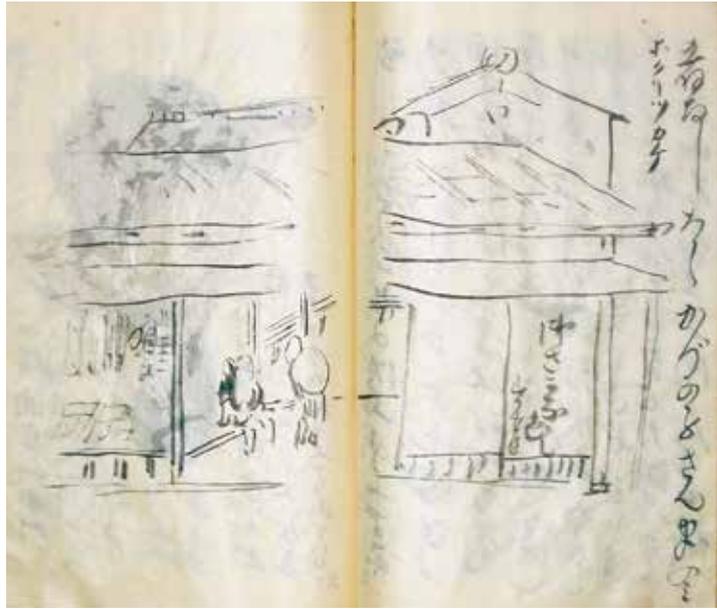
※ 茨 草葺。茨で屋根を覆う。

※ 清水流 桐生およびその周辺では、渡良瀬川や桐生川から水を引いて、用水が数多く流れていた。

※ 車 水車。

酒店の図

図中に「御さかな色々 山木屋」とある。



ボクリツカケ
小俣酒店所^レ鬻^ッ 灰色ノ菌、土俗呼^{ビテ}曰^ッ、ボクリツカケ。又呼^{ビテ}曰^ッ、黒皮茸。水ニ貯^ヘ、用フル時シボリ、上酢ニヒタス。食ス。上ニ生姜スリカクル。桐生又アリ、山アハビト云。

足利行き行路



渡辺崋山と歩く会の岡田幸夫氏の御教示を戴いた。

ボクリツカケ

小俣の酒店で売っている。灰色のキノコで、この地ではボクリツカケという。また黒皮茸ともいう。水中にためておき、使う時にしぼり、酢にひたして食べる。上に生姜をすってかける。桐生にもこのキノコがあり、(桐生ではこれを) 山あわびという。

※ ボクリツカケ クロカワのこと。イボタケ科のキノコ。黒皮茸、山鮑ともいう。秋、各地の針葉樹林の地上に群生する。苦味があるが、ゆでて大根おろしとあえたり、酢の物にして食べる。崋山は、「客坐録」(天保二年)にも同様の絵を載せている。珍しいキノコに強い関心を持ったようだ。

※ 鬻^ウ 売る。あきなう。

※ 菌^{キノコ} ここでは、「キノコ」をさす。

ボクリツカケノ図



葉鹿村に出^ッ、民家二戸、一「は」糠果、生果ヲうる。又ウルカヲひさぐ。一は酒飯アリ。此酒

飯アル家は奥山昌庵因あるをもて、壚（爐）をかこみ酒を命、醜悪、肴ツサハラ、茶を出す、飲べし。此家岩本氏が事をしり、予が其妻の兄をき、妹の貞操を称す。心甚（こころ）よろこぶ。日暮、ともしをかる。

葉鹿村に出る。民家が二戸あり、一戸は糠果、生果を売っている。また、ウルカを売っている。一戸は飲酒や食事ができる。この飲酒食事のできる家は奥山昌庵に縁があるので、囲炉裏を囲んで酒を注文した。上澄みの酒はまずく、肴は一つサハラだけ。茶を出してくれた。これはうまい。この家は岩本氏のことを知っており、私とその妻の兄であると聞いて、妹の貞淑さをほめた。私はたいへん気持ち良い。日が暮れたので、明かりを借りた。

- ※ 葉鹿村 下野国足利郡葉鹿村（足利市葉鹿町）。
- ※ 糠果 糠漬けにした果実か。
- ※ 生果 生の果実か。
- ※ ウルカ 塩漬けにした鮎のはらわた。
- ※ 因 つながり。関係。
- ※ 醜 味の薄い酒。上澄みの酒。

大前村「今」尾祐廸に逢ふ。後足利の蔦屋某の楼にて待んとやくす。山下村予醉甚、昌庵蘭溪予をたすけ民家に入、榻により華胥に入る。

大前村で今尾祐廸に会った。後に足利の蔦屋という楼で待ち合わせすることを約束した。山下村で私の酔いは甚だしくなり、昌庵と蘭溪が私を助

けて民家に入り、長椅子で（寝かせてくれ）、私はよい気持ちで寝た。

- ※ 大前村 下野国足利郡大前村（足利市大前町）。
- ※ 今尾祐廸 前号参照。
- ※ 蔦屋 足利の旅館。
- ※ 山下村 下野国足利郡山下村（足利市山下町）。
- ※ 予醉甚 華山は、酒はまずいと言いなながら、妹のことを褒められたらうれしくなって、飲み過ぎて歩けなくなった。人間味あふれる一幕でしょうか。
- ※ 榻 細長い床几。腰掛。寝台。
- ※ 華胥 昼寝。午睡。中国古代の天子黄帝が昼寝の夢に見たという理想郷「華胥の国」にちなんで、よい気持ちで昼寝することを「華胥の国に遊ぶ」という。

飲酒睡眠を描いた図



昌庵蘭溪先に足利にいたり、予いたくつかれしをあはれミてかごを迎ひにこせしかば、やがてうちのりて夢に蔦屋に到。此間半里ばかり五十九部村といふ。岡田立助、武井孫右衛門、さきにながやどりに至り待つ。

昌庵と蘭溪は先に足利に着き、私が見たいへん疲れているのを憐れんで駕籠を迎えによこしてくれましたので、やがて私はそれに乗って夢うつで蔦屋へ行った。この間は半里（約2km）ほどで、五十



部村という。岡田立助と武井孫右衛門が先に私の宿へ行って待っていた。

※ **五十部村** 下野国足利郡五十部村（足利市五十部町）。

※ **岡田立助** 一七九一〜一八三三。朝川善庵に学び、長崎・京都にも遊学する。のちに五十部村代官となる。

岡田立助、名ハ坤、字ハ(空字)、号ス東塙、下毛足利郡五十部村ノ人。世ニ事(空字)侯ニ。五十部、即チ侯ノ且ニ別封之地ト、故ニ岡田氏、世々為ニ此地ノ代官。頗ル好学、好ミ詩、属ス文ヲ。始ニ從ニ遊ス朝川善庵ニ。時ニ清船漂ニ到ル駿州(空字)浦。々々、隸ニ韭山県令江川君ニ。使メ朝川善庵ニ筆語通釈セ、東塙ハ又為ニ之ノ副。善庵ハ事半(バシシ)而帰リ家ニ、東塙ハ能ク終レ之ヲ。紀事著一書、名曰「漂客筆話」ト。

岡田立助、名は坤、字は(空字)、東塙と号す。下野国足利郡五十部村の人である。(空字)侯に仕える。五十部村はすなわち侯の別封の地であり、そのため岡田氏が代々この地の代官であった。たいへん学問を好み、詩を好み、文章を作った。初め朝川善庵に師事した。時に清船が駿河国(空字)(実は伊豆下田)の浦に漂い至った。その浦は韭山県令江川英毅の管轄に属する。朝川善庵が筆談による聞き取りの使者となり、東塙はまたこの補佐役となった。善庵は事半ばで家に帰り、東塙はよく最後まで務めた。その記事を一つの書に著わし、名づ

けて漂客筆話という。

※ (空字) 侯 河内丹南藩高木氏一万石。

※ 属文 文章を作る。

※ 朝川善庵 一七八一〜一八四九。江戸時代後期の儒学者、折衷学派。名は鼎、字は五鼎。

※ 善庵と号した。平戸藩主松浦静山の礼遇を受け、のちその儒臣として仕えた。

※ 清船漂到 『国史大辞典』によれば、文化十二年(一八一五)冬のこと。

※ 駿州 『国史大辞典』によれば、これは間違いで、伊豆下田が正しい。

※ 韭山県令江川君 江川英毅。英龍(号坦庵)の父。享和元年から天保五年まで伊豆韭山の代官を務めた。

※ 漂客筆話 朝川善庵著『清船筆話』(文化十二年刊)のことか(『国書人名辞典』『国書総目録』にこの書名・人名あり)。実際には岡田東塙が執筆したという。

後ニ遊ビ長崎ニ、又遊ビ洛ニ、漫遊シテ窮ス。志ニ。年猶ニ十餘、気盛シ志鋭ク、所欲スル無シ不レ為。故ニ放浪不羈、身亦甚ク窮困極メ、売リ詩文ヲ以テ自給ス。居ルコト、五六年、以テ其父致仕ニ帰リ受ク家ヲ。家固ルコト、豪富也。雖モ家道衰薄ニ、巍然トシテ高門。屋後、山高ク、松幾万章、不レ見ニ其ノ膚。東塙、讀書シ其中ニ自ラ樂シム。詩人墨客ノ過ニ足利者、到ニ此ノ堂ニ乞フ詩書者、不レ絶ヘ云。

後ニ遊ビ長崎ニ、又遊ビ洛ニ、漫遊シテ窮ス。志ニ。年猶ニ十餘、気盛シ志鋭ク、所欲スル無シ不レ為。故ニ放浪不羈、身亦甚ク窮困極メ、売リ詩文ヲ以テ自給ス。居ルコト、五六年、以テ其父致仕ニ帰リ受ク家ヲ。家固ルコト、豪富也。雖モ家道衰薄ニ、巍然トシテ高門。屋後、山高ク、松幾万章、不レ見ニ其ノ膚。東塙、讀書シ其中ニ自ラ樂シム。詩人墨客ノ過ニ足利者、到ニ此ノ堂ニ乞フ詩書者、不レ絶ヘ云。

後に長崎に遊学し、また京都に遊学した。心のままにあちこち遊び歩き、志を果たせない。年はまだ二十余り、気は盛んで志は鋭く、欲することは何でもする。そのため放浪し束縛できず、その身はまたたいへん困窮を極め、詩文を売って自給した。そのようにして五、六年、その父が官職をやめたので(郷里へ)帰り、家を継いだ。家もとより豪富である。家政は衰えてきたといっても、泰然自若として高貴な家柄を誇っている。屋敷の後ろの山は高く、松がたくさん生えへだてて山肌が見えない。東塙はその中で読書し、自ら楽しみ、詩人墨客の足利を通る者は、この堂に来て詩書を乞う者が絶えないという。

※ 不羈 束縛できない。

※ 巍然 巍然。高くそびえたっている様子。抜きんでて偉大であるさま。

※ 高門 高貴な家の立派な門。よい家柄。「巍然高門」で、泰然自若として高貴な家柄を誇っていること。

※ 幾万 何万に同じ。幾万重。数の知れないほど重なる。

※ 章 障。へだてる。

※ 不レ見ニ其ノ膚 松が多くて山肌が見えない。

武井孫右衛門、名ハ長昭、足利今福村ノ農、善クス歌ヲ。

武井孫右衛門は、名を長昭といい、足利今福村の農民で、歌をよく詠む。

(続)

田原市博物館所蔵品から 渡辺華山筆「客坐掌記（天保九年）」⑫



藝州候蔵 三幅 風紅雪*

(図) 桃樹 ()

色共桃花薰不同、于
山烟月有其中、立残
孤彰君須認、爰去上林
豁願記 璇源*

浦陽
王印

(図) 葡萄栗鼠図 ()

梅屋筆* 新宮家蔵*

藝州候 広島藩主浅野家。
風紅雪 花(桃)吹雪

上林 陝西省長安県、秦の始皇帝が作り、漢の武帝が規模を大きくした庭園。

施源 施源 清、字実君、号蒙泉、呉県人、乾隆拳人、官は舒隆知県、著「愛静詞」「一決集」「浮湘前後集」。(大漢和・⑤679)

浦陽 浙江省浦江県。

梅屋 妙琴か、明、字無絃、華陽(成都)人、僧、善詩、工書、画、称牛和尚、画梅入妙、自号梅屋老人。(中・321)

新宮 新宮涼庭(一七八七~一八五四)名涼亭、のち涼庭、号駆豎斎、蘭医、京都に開業、学舎順正書院を開設、著に「解剖則」「西遊日記」。(国書人名・② 562)



(図) 花鳥画

- * 秦川勝 四大寺中ノ院什
- * 野見宿祢像 興福寺
- * 淡海公像 九條殿下蔵
- * 大織冠像 多武峰護国院什
- * 信實画身像 東二條寂光寺什
- * 本朝年代人物掌覧
- * 小野道風画と申伝

秦河勝 6世紀末〜7世紀前半の官僚、山背国葛野地方の豪族で、広隆寺を造る。

四大寺 朝廷の祈願所であった四寺院、奈良時代は薬師寺、元興寺、興福寺、大安寺、平安時代は東大寺、興福寺、延暦寺、園城寺。

野見宿祢 垂仁天皇に仕え、埴輪相撲の起源と結びつけられる人物。

興福寺 法相宗大本山、奈良市登大路町、天智八年(六六九)、藤原鎌足の病氣平癒を祈り、大人鏡女王が建立した山階寺に始まる、和銅三年(七一〇)平城京に移し、興福寺と号した。

淡海公 藤原不比等(六五九〜七二〇)、藤原鎌足の子、右大臣、没後、太政大臣を贈られた。

九條殿下 九条尚忠(一七九八〜一八七二)、本姓藤原、はじめ二条氏、名尚忠、号陶化翁、左大臣を経て関白に任ぜられた。(国書人名・② 109)

大織冠 藤原鎌足(六一四〜六六九)、中臣鎌足、中大兄皇子(天智天皇)と蘇我入鹿を倒し、大化改新をなしとげる、天智八年藤原朝臣の姓をさすけられる。

多武峰 奈良県桜井市南部の談山神社の北、御破裂山(670m)を主峰とする。

護国院 明治二年(一八六九)多武峰一山すべて談山神社とされ、藤原鎌足木像を祀る聖霊院を本殿、護国院を拝殿、十三重塔を神廟とした。

小野道風(八九四〜九六六)、小野篁の孫、草書にすぐれ、藤原佐理、藤原行成とともに三蹟と呼ばれる。

藤原信實(一一七六〜?)鎌倉時代の歌人・画家、藤原隆信の男、正四位下、左京権大夫、多くの似絵を描く、「柿本人麻呂像」(三十六歌仙絵巻)。(国書人名・④ 237)

寂光寺 顕本法華宗本山、京都市左京区北門前町、東大路仁王門通上ル、開基は日淵、塔頭本因坊に囲基僧が住んでいたのが本因坊といわれた。

本朝年代人物掌覧 鶴峯戊申(一七八八〜一八五九)編、前編七冊目録一冊、文政元年。(国書総目録・⑦ 408)

「少年物語 渡辺華山」

読書感想文について

公益財団法人

華山会では、郷

土の偉人渡辺華

山先生の功績を

後世に伝承する

事業の一環とし

て、毎年市内小

学六年生に対し、「少年物語 渡辺華山」の冊子

をプレゼントしてまいりました。感想文の募集

を行ったところ、二二三件の応募をいただきました。

した。

この中から優秀賞に選定されました六点の作品をご紹介します。

応募いただきました学童の皆さんやご協力をいただきました各学校の先生方々に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人華山会事務局



少年物語 渡辺華山

大草小学校 六年 中田美玖

私はこの本を読んで、華山先生が日本のことを考え、他の人のことを考え行動した、すごい人だということを学びました。

華山先生は、とても貧しい家の子として生まれました。お父さんは、まちがったこと、悪いことをすることの大嫌いな方で、みんなから敬われ、したわれていました。こんなすてきなお父さんがいてうらやましいと思いました。

私が華山先生についてすばらしいと思ったことは、志が強かったことです。殿様の行列にぶつかってしまい、「殿様を教えることができるような先生になろう」と思って本当にそうになりました。私は逆に、すぐにあきらめてしまっているので、華山先生のこととはとてもすごいと思いました。華山先生が絵を描き始めた理由には、とても驚きました。描いた絵を売って貧乏な家族を救いたいと思ったのです。ここまで読んできて納得もしました。家族のことをとても大切に考えていた華山先生らしいことだとも思いました。

この本を通して特に私が心打られたところは、一つの悲しいことに会うごとに心がくじけてへこたれる人はだめな人ですが、華山先生は決してそうではなかったところです。なんぎなこと悲しいことに会うごとにふるい立つて必ず立派な人になって家族を幸せにしてやろうと思うところ。悲しいことなどがあっても家族のことを第一に考えられるのもすごいことだし、今はそういう人はあまりいないと思います。

そして、華山先生の心の広さに感動しました。華山先生は、自分の家が貧しく大変なはずなのに、人を助けてお礼をくれると言ってもらおうとします。とても欲がなく、人のことを考えてあげられる人なんだと思いました。

また、華山先生は、当時鎖国をしていた日本を世界のいろいろなところから攻撃されないか、とても心配していました。日本のことを考えていたことがよくわかります。そしてそれをみんなに理解してもらおうとしていました。

それでも華山先生は、最後には、自分の周りの人や家族のことを考え、自殺をしまいました。相手が悪いと思うような行動をしたのに、家族などに残した手紙には、自分の責任としか書いていなかったのです。華山先生は最後まで他の人のことを自分のことよりも考えていたんだと思います。私は華山先生のこのような行動がとてもすごいと思ったし、たくさんの人にされた理由がわかった気がします。

七月十二日には、大草小学校の六年生全員で城宝寺へ行きます。私も華山先生に少しでも近づくことができるよう、華山先生のお墓にお参りしたいと思います。

「少年物語 渡辺華山」を読んで

福江小学校 六年 伊藤滝都

ぼくが、この渡辺華山の本を読んで、思ったこと、気づいたことが三つあります。

一つ目は、「親孝行」です。渡邊華山は、どんなときにも何があっても、親のことを考え、「親思い」でした。

華山さんは、二十代後半の秋、殿様のおともで田原に來ました。秋の終わり、やがて冬になる野山や道の風景は、華山の心を楽しませました。華山さんは、旅の途中に見える景色、おだやかな海、まだ残るはこねのみみじ、雪をのせた富士の姿など、絵に表したいものがたくさんありました。

そのころ、九州の長崎へ、新しい西洋の文明がどんどん入って来ていました。そして、当時の青年たちは、みんな長崎へ行きたくてたまりませんでした。華山さんも新しい学問を学ぶため、絵を描くために行きたい気持ちが強くなりました。しかし、今、お父さんをお願いしてもとても許してもらえない、だまって家を出ると、両親に大変心配をかけ親不孝となる。けれど、この地で五年がまんをし立派になれば、父母も認めてくれる。親不孝もつぐなえるだろうとこの地にとどまる決心をしました。

そして、そのとき一つの詩をつくりました。その詩の意味は、「自分の力には限界がある人と自分とは違う。人のまねをするようでもどうしても行きたい。けれど、親はいつまでも生きられるものではない。だから、自分は親孝行をする」というものでした。ほくが心をひかれたのは、「親はいつまでも生きていられるわけじゃない」というところです。ほくも両親のことを大切に思っています。華山さんの言葉で、いつそう、親孝行していきたいという気持ちになりました。

二つ目は、華山さんの「絵や書に対する努力」です。華山さんは、生涯、絵や書のたくさんの作品を残しました。子どもころから写生をしたり、本を写したり、努力をおこたりにませんでした。ほくが、華山さんの作品を見て

いると、特に、人物の表情がうまいと思います。特徴が生き生きと描かれていて、その人の人がらまでが見えます。華山さんは、努力を続けて上達したのだと思います。ほくも習字を習っています。今、自分は一級と準初段なので、もつとがんばろうと思いました。

三つ目は、華山さんの「国を思う真剣な心」です。華山さんは、小関三英や高野長英とともに外国について研究する会を作りました。そして、この会を「尚齒会」と名付けました。「尚齒」とは、「年をとった人を尊び、敬う」という意味です。華山さんたちは、地理や歴史など、いろいろな外国の本を読みました。オランダ語を教わりながら、たくさんのことを学んでいきました。それらは日本で一歩新しい学問の研究でした。

また、日本の政治のことも話しました。しかし、それらの考えは、そのころの幕府には受け入れられず。華山さんは、藩や家族に迷わくをかけたために、自刃してしまいました。華山さんは、外国について学べば学ぶほど今のままではだめだと考え、国をよい方向へ進めようとしていたのに、時代に合わず、気の毒だと思いました。けれど、華山先生の国の将来を思う真剣な心は、ほくに強く伝わってきました。また、自分より先に人のことを思う華山さんの本当のやさしさや強さに心をうたれました。ほくは、今、小学校六年生で、この先、どんな職業に就き、どんな将来が待っているかはわからないけれど、しっかりと勉強をし、今できることを精一杯やっしていきたいと思いました。

華山先生の生き方

童浦小学校 六年 中 根 文 弥

僕は、渡邊華山の名前は知っていても生き方やなぜ田原で有名なのかなど、名前意外のことは全く知りませんでした。ただすごい人とは思っていませんでした。渡邊華山の本をもらった時、少し楽しみでした。

華山先生は小さい時から勉強熱心でそれに親や家族のことを一番に思っていました。それは、大人になっても変わらず人のことを一番に思い、絵や勉強の才能があるにも関わらずもっと上手になろうと勉強を続けました。しかし、華山先生を恨む鳥居という人のたくらみで華山先生は悪者のようにされます。そしてこれ以上殿様や家族にめいわくがかからないように十月十一日の正午に四十九歳で自殺します。華山先生は、自分をはめた人達を決して恨んだりしませんでした。

僕が、「渡邊華山」を読んで一番に残ったところは、たとえびんぼうでも村人が感謝の気持ちでお礼のお金を華山先生に持っていました。でも華山先生はありがたくだき、そして「村で何か入り用があったら、つけて下さい。」

と言ってそのお金を村人にあずけたところです。この場面を読んで僕は、華山先生に対して心の広い人というイメージや優しい人というイメージを持つようになりました。華山先生は、華山先生を恨む人にはめられますが、その人を決してにくんだり、恨んだりしなかったそうです。この場面からもやはり心の広い人というイメージがあります。もし僕がそういう立場だったらその人を強く恨むと思います。殺意もでてくると思います。でも華山

先生はそういう感情が一切わきませんでした。僕も広い心を持つ人になれたらいいなと思います。

僕が「渡辺華山」を読んで思った事はどんな時でも華山先生は悪い事が全く出来ない人だと思いました。華山先生はたとえ自分がどんなにびんぼうでも人の事を第一に考え、困っている人がいればお金などをめぐんであげるとても親切な人でした。また華山先生が牢に入れられた時、奉行所の役人が華山先生の家を調べました。しかし田原藩の家老をしていた華山先生の家からは金目の物は出てきませんでした。それを見た奉行所の役人でさえ、「華山先生は悪い事が出来ない人だ。」

と言っているほどでした。

僕が華山先生から学ぶ事は、華山先生の人生そのものだと思いました。華山先生のような人にはとうてい出来ませんが、それでも多少しでも近づけるように広い心を持ち、人の事を第一に考えていきたいと思いました。華山先生の生き方と自分の今の生き方を照らし合わせて自分の生き方を直しながら、華山先生のような人になれるように努力していきたいと思えます。

「少年物語 渡辺華山」

田原中部小学校 六年 田邊 蒼 翔

ぼくは、渡辺華山先生の人生に大変心を打たれました。

華山先生は、弟や妹が生まれたことや、お父さんの、重い病気に必要な薬を買わなくてはならなかったため、幼い頃とても貧しい生活を送っていました。食料やふと

んなど、生活に必要なものを、買うことができずして。それでも、強い気持ちを持っていた華山先生は、お父さんの看病を毎日欠かさずし、好きな絵をかき、その絵を売り、生活を支えながら学問にはげました。ぼくは家族のために努力し続ける姿にとっても感動しました。

華山先生は十二才の頃、日本橋で殿様の行列にぶつかってしまいます。この時代は行列を横切った者は首を切られてもおかしくないといわれていましたが、暴力を受けるだけで済みませんでした。その時、くやくしく思った華山先生は、殿様の上立に立てる道は、殿様を教えることができず、大学者になることだと考え、その後、勉強にはげんたそうです。ぼくは同じ十二才だけれど、将来何になりたいか、将来何がしたいか考えたこともありません。それどころか、具体的な目標もありません。小さいことでも、何か目標に向かってがんばっていくことはとても大切なことだと気付かされました。

それから、ぼくが一番印象に残っていることは、「報民倉」を建てようと計画し、実行させたことです。これは貧しい田原藩の人たちを思って、いざという時にうえ死にしないように、米や麦をためておくためのお倉でした。華山先生はお金がなかったにもかかわらず、自分でかいた絵を売って、この報民倉に十俵もの米を一番最初に寄附しました。この田原藩みんなの命を一番に考えた華山先生の行動は、他の多くの人たちから信頼され、その結果報民倉の中にはたくさんさんの寄附による食料が集まりました。

その後、天保の大ききんが起きた時、各地でうえ死にする人がたくさん出ましたが、田原藩は報民倉があったおかげで、死者を一人も出ませんでした。

ぼくは、華山先生の優しさと思いやりはすばらしいと

思いました。自分の生活が苦しい状況にもかかわらず、他の人のことを一番に思って行動しようとする姿は、本当に尊敬できます。

その後華山先生は亡くなってしまいましたが、今の時代になっても語り継がれ、尊敬され続けているのは、常に努力し、他人を大切にしている広い心を持っているからだだと思います。

こんな偉大な華山先生が、ぼくたちが住んでいる田原に生きていたことをほこりに思います。ぼくは、華山先生に追いつくことはできませんが、少しでも近づけるように、これから生活していく中で思いやりを持つとともに、どんなことにも努力していきたいと思えます。

「少年物語 渡辺華山」を読んで

泉小学校 六年 小笠原 愛

最後まであきらめず、何事にも一生けん命につき進む意志の強い人、これが、私が感じた華山先生の印象です。

華山先生は、貧ぼうだったにもかかわらず、自分がおかれているかん境をしっかりと受け止め、自分にできることをとことんやり続けていたところがすごいと思いました。そして、自分が得意なことを生かして、家族や周りの人々を助けようとする華山先生の生き様に強く心を打たれました。

私は、小学校一年生の持久走大会で、順位があまりよくありませんでした。そのため、次の年の持久走練習では、一位の子と同じ回数、運動場を走ろうという目標を、母

と立てました。しかし、一位の子は私より断然速いので、練習が進むにつれ、一周、二周と差をつけられ、なかなか目標を達成することができませんでした。母にはげまされていただけ、結局一位の子との差はどんどん広がって、目標を達成することは自分には無理だと勝手に決めて、がんばりぬくことをあきらめてしまいました。そんな自分を今振り返ってみると、とてもはげしく思います。そう考えてみると、ますます華山先生の生き方や考え方はすごいことだと感じます。

華山先生が十二才の時、大事件が起こりました。そこで華山先生は、殿様を教えることができるような先生になろうと志を立てました。そして田原藩の家老となり、「百姓があるからこそ、殿様がある」、つまり人民によって国が立っていくのだという考えを伝えました。さらに、華山先生は、人々を飢え死にさせないように、「報民倉」を建てました。実際に天保の大ききんが起きたときは、田原藩は華山先生のおかげで、だれ一人命を落とすことなくすんだのです。

私は三年生からそろばんを習い始めました。ある日、なかなかそろばんのやり方を覚えられない友達に対して、先生は厳しく指導をしていました。同じ場所にいた私は、この先生はとても熱心な先生だ、この先生についていけば間違いないと思いました。それから、時間のゆるすかぎり、上の級を目指してがんばりました。華山先生のような大きな志とまではいかないけれど、私の人生の中で一番強い志となりました。これからも、華山先生を見習い、できるまであきらめずにつき進みたいと思います。くじけそうになったときには、「少年物語 渡邊華山」の本を思い出し、一生けん命取り組んでいきます。

私は田原で生まれ、田原で育ちました。こんなにすば

らしい華山先生が田原に関係していると知り、とてもうれしく、誇りに思います。私も、華山先生の生き方にはじないよう、大きな志をもって生活していきたいと思えます。そして、今日まで田原を築いてきた人たちの思いを受け継ぎ、故郷である田原の一員として生きていきたいと思えます。

偉人 渡邊華山先生

田原中部小学校 六年 齋藤 悠羽

華山先生は、新しい夜明けを願って、命をかけて考えぬいた人です。そして貧しい家庭で、苦勞をしながらも、たゆまずくじけず、勉強にはげんで、立派な人格を作り上げ、画家、蘭学者、家老と、活やくしました。

この時代の日本は、長い間のみだれた政治を、なかなか立て直せませんでした。しかも、その頃は、有名な天保の大ききんで、米を取ることができず、日本中が苦しみました。それを見た華山先生は、なんとかして早く米をためて、いざというときにうえ死にしないようにしなければいけないと考えました。そして、報民倉という倉を作り、そこに穀物を少しずつためようという案を殿様に申し上げました。すると、すぐに賛成し、倉を建てることになりました。そして、なんとこの報民倉のおかげで、いろいろな災害が来ても、田原藩では、うえ死にする人が、一人も出なかつたのです。このことにほくはとてもびつくりして、すごいと思いました。

この報民倉は今の時代でも、残されています。その中

には、かんばんや、ごはん、かいちゅう電灯などが入っています。しかも周りには、災害用の公園があります。その公園内では、火をたくこともできるし、水をくむこともできて、災害が来ても何日か過ごせるような場所になっています。今でも華山先生の教えが受けつがれているという事は、それだけ、華山先生への影響は田原にとつては、とても大きかつたということだと思えます。

華山先生は、最後の時まで、他人のことを考えていました。ろうごくの中でも絵を書いて、少しでも、家族の借金を無くそうとしていました。華山先生は、自分に対するうわさや悪口には、気にしませんでした。でも、自分のうわさで人にめいわくがかかることには考えこんでしまつて、先生にとつて、なによりもつらいことでした。これを見てほくは、自分はどうでもよくても、他人にめいわくをかけたくないという思いをもっていてすごいと思いました。

自分にあてはめたら、真逆でした。

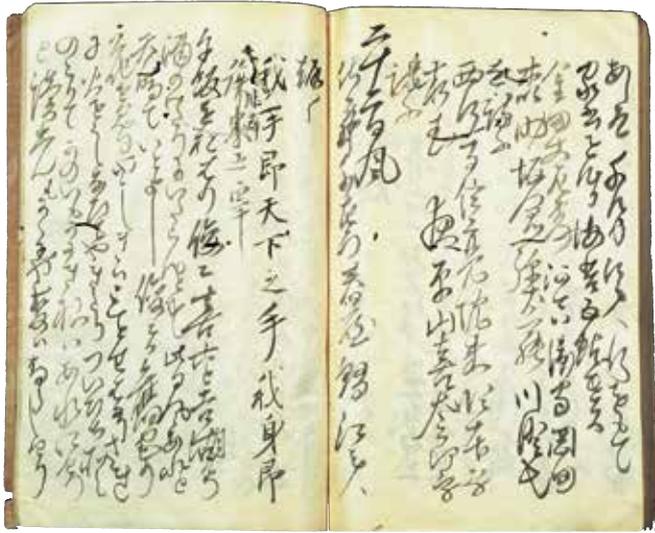
ぼくの場合は、自分をきにして、他人にめいわくをかけてしまつています。でも、この本を読んで少し気持ちが変まりました。自分のことしか考えないと、人に信らされなくなつてしまいます。だから、少しずつでもいいから、他人の気持ちも考えながら行動できる人になり、自分にできることを考えたいです。



が見え、現在とあまり変わらない風景だったようです。あばらの入江とは、現豊島町の安原崎あたり、大巖のはなどは、『渥美郡史』の引用にある吉胡の岩ヶ鼻と思われる。

「このわたりハ早損の憂愁あれバ所々に池を掘て水を貯ふひとき(は)よし。」

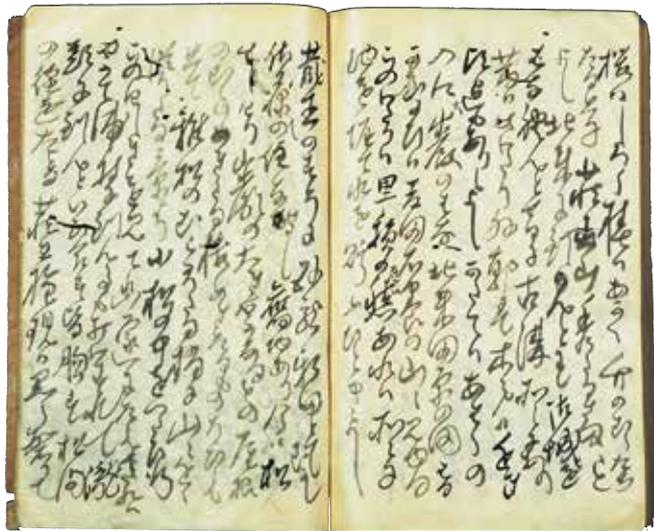
「このわたり」とは北荒井一帯のことと思われるですが、『田原町史』中間の「田原町年表」には、「○池できる」と早魃に備えてため池を開発した記述が多く見られ、藩全体に「早損の憂愁」があり



『全楽堂日録』二月二十二日①

ました。江戸時代だけでなく、渥美半島全体は大きな川がなく、豊川用水開通までは干害に苦しんできました。また、早魃だけでなく、江戸時代は、汐川の堤防が決壊し、水害の被害もたびたびありました。

「蔵王のすそに臥龍新田とてむかし佐藤氏の住なせし旧地あり。今ハ松生しげり巖の大きやかなるもの屋根のむねめきたる楼めきたるものそびえ出で、稚松のむらがりたる梢に山々近く聳たる景より小松の中をつたひ行。このけしきを見て幽邃に



『全楽堂日録』二月二十二日②

たえざればやがて浦村に到ん事も打わすれて、瀧頭に到んといひ合す。」

「臥龍新田」は、『萬留帳』にある「臥了新田」のことで、吉胡町木綿畑のあたりです。天明三(一七八三)年の『萬留帳』に、「臥了新田丹羽彦平より吉胡村江譲り申度旨、双方願書、昨日差出候二付、御年寄中江差上申候処、被達御聴二双方願之通被仰付候段、喜兵衛殿被仰渡候。」(一月十九日)とあるように、丹羽彦平から吉胡村へ譲られます。丹羽彦平は、前出の丹羽作左エ門の子孫と思われるます。臥龍新田のあたりに、田原藩家老佐藤半助の先祖が住んでいたようです。

華山は、蔵王山をバックに、松や岩の自然物と家の屋根という人工物が織りなす景色がよほど気に入ったのか、進んでいくうちに、感に堪えなくなり本来の目的地である浦村のことはすっかり忘れて「瀧頭」に行くことにしたようです。「瀧頭」の方が、このあたりより景色がよいことを同行の鈴木春山と鈴木喜六が勧めたからでしょうか。容易に目的地を変えたことから、この日は、気分転換のウォーキングに出かけたといったところでしょうか。

なお、幽邃とは、景色が奥深く静かなことです。

(続)



博物館企画展のご案内

十月二十九日(土)～十一月二十七日(日)

秋の企画展 万葉千首完成50年

鈴木翠軒の書『万葉の世界』

(企画展示室一・二)

展示解説 十一月三日(木・祝) 午

前十一時～ 学芸員天野敏規

ワークショップ 「淡墨で書作品を書こう」

十一月六日(日) 午後一時～

二時(小学三年生～中学生)・午後二

時三〇分～四時(一般) 講師・書家・

川口青澄氏 定員各15名(要申込・

先着順)

同時開催 誕生二百十年 伊藤鳳山

(特別展示室)

十二月三日(土)～平成二十九年一

月二十二日(日)

冬の企画展 市町村立美術館活性化

事業 日本・ベルギー友好150周年

記念 姫路市立美術館所蔵ポール・

デルヴォー版画展『幻想のヴィーナ

スたち』

(企画展示室一・二)

講演会 「ポール・デルヴォーの世界」

十二月三日(土) 午後一時三〇分～

講師・高瀬晴之氏(姫路市立美術館

学芸課課長補佐) 会場・華山会館

講演会 「ポール・デルヴォーの魅力

の秘密」 一月十五日(日) 午後一時

三〇分) 講師・村松和明氏(岡崎

市美術博物館 学芸員) ※整理券必

要 会場・華山会館

文学座朗読会 文学座俳優高橋ひろ

しさんによる「青い鳥」の一人語り

ライブ 十二月十一日(日) 午後一

時三〇分～午後二時三〇分※整理券

必要 会場・華山会館

印刷博物館版画によるワークショップ

参加費3000円 一月十五日(日)

申込制(先着順) 申込12月3日(土)

から

1回目午前10時～ 定員10名

2回目午後1時～ 定員10名

チョコレートの香りのするカラフル

なポストカードと本展オリジナルデ

ザインのマイノートの印刷・製本が体

験できます。

展示解説 十二月一〇日(土)・一月

二十二日(日) いずれも午前十一時

～ 副館長 鈴木利昌

同時開催 誕生百九十年 野口幽谷

(特別展示室)

平常展のご案内

一月二十八日(土)～二月二十六日(日)

金子金陵と渡辺華山 (特別展示室)

三月一日(水)～四月二日(日)

渡辺華山の弟子 福田半香 (特別展

示室)

二月十八日(土)～四月二日(日)

ひな人形と初風展 企画展示室

期間中スタンプラリーを開催します

渥美郷土資料館企画展のご案内

十月二十九日(土)～十二月十一日(日)

秋の企画展 渥美半島の縄文文化

をさぐる、海をめぐる渥美半島の魅

力「渥美半島の縄文貝塚と保美貝塚」

(企画展示室)

展示解説 十一月五日(土) 午前十

一時～ 川添和暁氏(愛知県埋蔵文

化財センター)

シンポジウム 十一月五日(土) 午

後一時三〇分～ 東北の研究者2名

と縄文時代の魅了を語り合う座談会

「伝え生かそう 縄文遺跡と地域づく

り」 渥美郷土資料館

日本を代表する研究者4名によるシ

ンポジウム「渥美半島の縄文貝塚と

保美貝塚」 十一月二十三日(水・祝)

午後一時三〇分～ 田原文化会館

縄文遺跡めぐり(バス) 縄文ワーク

ショップ 渥美郷土資料館ほか

参加料、申込方法等詳細はチラシ等

でお知らせします。

二月一日(水)～三月二十日(月・祝)

企画展 第31回ひな祭り展

(企画展示室)

江戸時代から現代までのひな人形の

変遷を展示。

イベント 着物を着ておひなさま気分

になろう 二月二十六日(日)・予定

県内の博物館・資料館をめぐるひな

祭りスタンプラリーを開催します【賞

品有】

観覧料

秋の企画展 一般五〇〇円(四〇〇円)

冬の企画展 一般六〇〇円(四八〇円)

企画展開催時は小・中学生無料

平常時 一般 二一〇円(一六〇円)

小・中学生 一〇〇円(八〇円)

(一)内は二十人以上の団体料金

渥美郷土資料館は無料

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその翌

日)、展示替日、十二月二十八日

一月四日

華山会報 第三十七号
平成二十八年十一月一日発行
編集発行 公益財団法人華山会
理事長 鈴木 愿
常務理事 山田憲一
事務局長 讃岐俊宣
〒四四一―三四二―
愛知県田原市田原町巴江一二の一
TEL〇五三一・二二・一七〇〇
FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力 田原市博物館
華山・史学研究会
会長 山田哲夫
吉川利明 加藤克己
石川洋一 小林一弘
林 哲志 別所興一
中村正子 小川金一
柴田雅芳 中神昌秀
池戸清子

※華山会報ご希望の方は華山会館・
田原市博物館にお申し出ください。
次回発行予定 平成二九年四月二日